

朝日新聞「プロメテウスの罠」に相沢みつや県議 登場！

—平成24年9月16日（日）全国版3面—

朝日新聞は、東日本大震災を題材とした長期連載のコラム「プロメテウスの罠」を掲載していますが、シリーズ⑩がれきの行方で相沢みつや県議の一般質問（6月28日）や、「いのちを守る森の防潮堤」推進議員連盟での活動を紹介しました。

担当の吉田啓記者は、膨大ながれきに苦しむ被災地の状況、広域処理問題、環境省の巨額予算の行方など、鋭い取材と観察力で「がれき問題」を見事に浮き彫りにしております。

プロメテウスの罠「がれきの行方⑩ 防潮林をつくろう」

「広域処理に頼るのはやめたらどうか」。そんな声は宮城県議会からも出はじめた。

今年6月28日の県議会定例会。質問に立った自民党県議の相沢光哉（73）は指摘した。

「広域処理が誘発した放射能汚染をめぐる住民感情のあつれきと風評被害の拡大などを考えると、今回のがれきの処理方針が本当に正しかったのか、大いに疑問である」

大量のがれきの処理を広域処理にゆだねる方法が「唯一、正当かつ有効な選択肢であるとは思えない」と相沢はいった。

それに対し県は、がれきの量が減ったとしても、114万トンの県外処理が必要だと答えた。

理由として、①仮設焼却炉29基がすべて稼働しても3年以内では処理が終わらない②リサイクルできる木材などの利用先が県内では限られる③埋め立て処分場の容量に余裕がない、を挙げている。

しかし相沢には、その問題を解決できるアイデアがあった。「いのちを守る森の防潮堤」構想だ。

がれきの中からコンクリートや木の無害なものを選ぶ。放射能濃度や化学物質が安全基準内のもの。それを土と混ぜ、高さ20～30メートルの丘を築く。その丘に、タブノキや山桜など、それぞれの土地に根ざした広葉樹を植えて防潮林をつくる計画だ。

この防潮林を被災した沿岸部のあちこちにつくっていけば、かなりの量のがれきを処理できる。

がれきの丘に木が育ってしっかり根を張れば、いつかまた津波が来てもそのエネルギーをそいでくれる。人々の避難所にもなる。

「燃やせば何も残らない。だが防潮堤にすれば、人々の生活の一部であったがれきが、津波の教訓とともに、千年先まで生かされる」

相沢は県議会の各会派に説いて回った。すべての会派が賛成した。

今年3月、59人の県議全員が参加して推進議員連盟が発足した。連盟は国会や環境省、国土交通省、林野庁などに働きかける。

6月、環境省は「ゆっくり腐るので、メタンガスなどの発生のおそれが小さい」として、丸太状の流木などの埋め立ては認める「考え方」を示した。だが、木くずや建築資材はガスの発生や地盤沈下、有害物質を含む可能性を理由に認めなかった。

それに対し、「検討が不十分だ」と怒る植物生態学者がいる。「森の防潮堤」のそもそもの提唱者、宮脇昭（84）だ。

（吉田啓）

